

吉阪隆正の日記帳に関する報告

日本近代

吉阪隆正

アーカイブズ

正会員 ○ 本橋仁*¹
同 廣瀬翔太郎*²
同 中谷礼仁*³

0. 研究目的

建築家・吉阪隆正(1917-1980)が組織したU研究室の建築作品において、「不連続統一体」「有形学」といった言葉は、建築に形を与える重要なツールであった。さらに、言葉は組織論や文化論にまで及び、それらは既成概念にとらわれない視座をもつものである。

こうした思想を形成した背景に、外交官の父をもち幼少期から各国で暮らしたという出自、さらに登山家として自然に身をおくという経験が、挙げられ得るだろう。吉阪の多分野における精力的な活動の全貌を知りうる資料として、「日記帳」の存在が挙げられる。

2015年、早稲田大学は吉阪隆正の親族が保管していた日記帳を含む個人資料の寄贈を受けた。早稲田大学建築史研究室では、それら資料の整理・リスト化を実施した。本稿は、これら資料の整理に関する概要と、とくに日記帳の詳細について報告を行うものである。

1. 吉阪隆正私蔵資料の概要

概要調査(2014年実施)

吉阪隆正の親族が保管していた資料の概要調査をおこなった。また、あわせて資料の履歴に関するヒアリングをおこなった。それら調査により、これら私蔵資料はもともと、吉阪の自邸¹より運ばれたもので、欠損・廃棄すること無く移送されたことがわかった。

保存作業とリスト化

これら私蔵資料を「早稲田大学建築学教室本庄アーカイブズ」²へ収蔵を行なった。自邸より移送時に、U研究室有志によりカテゴリ分けされ保存箱に収納されていた。箱自体は経年劣化していたため、移し替えをおこなったが、U研究室によるカテゴリ分けは尊重し、箱の分け方を変えずに移し替えた。また、日記帳については書かれた年代順に並べ替えた上で一冊ずつスリーブケースに入れ保管した。

2. 吉阪隆正の日記帳

日記帳概要

本研究で指す日記帳とは吉阪本人が日記を記した資料であり、全205冊が確認された。これらは概ね、〈日付〉、〈天気〉、〈日記内容〉の3項目で構成される。日記帳に類似した資料として、手帳に予定や記録を書いているものが見受けられたがこれらは今回対象外にしている。

日記帳日付をもとに、No.1-No.205の通し番号を振った。この日記帳は、日付や体裁等により大きく以下の三期に分類することができる。

第一期：1945年 - 1971年(戦後 - フランス留学)

日本での活動を記した日記帳8冊(No.1-No.6、No.10、No.11)と、フランス留学期間³における日記帳3冊(No.7-No.9)の全11冊となっている。概観すると、面会した人物や訪問箇所、その目的が日常的な記録とともに、自らの生き方や社会的な問題に対する思考や苦悩、そして建築設計についてのアイデアが書かれている。こうした日常的な記録は全期間を通して見られる。

第二次世界大戦後、1945(昭和20)年12月20日が現在確認されている日記の最初の日付である。ここから断続的に日記は書かれているが、フランス留学(日本発：1950年8月23日 - パリ発：1952年10月23日)を終えた後の1953年8月19日以降、日記帳の日付が大きく飛ぶことになる。

第二期：1957年 - 1971年

フランス留学後までの日記帳(第一期・1953年8月19日まで)から、ヴェネツィアビエンナーレ日本館⁴が竣工する1956年までの期間の日記帳が現在確認できない。しかし『建築学体系39』(彰国社、1977)においては、ベニス・ビエンナーレ日本館の施工における〈日付〉〈天気〉〈日記内容〉の3項目で構成された施工の記録が記されて



Fig.1 吉阪隆正私蔵資料の保管状況
(筆者撮影)



Fig.2 日記帳の変遷
(筆者撮影)

日記帳 No.1
最初の日記帳

日記帳 No.12
「三年連用常用雨日記」

日記帳 No.17
アルゼンチンツクマンにて

日記帳 No.70

Report on the diary by Takamasa Yosizaka

MOTOHASHI Jin, HIROSE Shotaro, NAKATANI Norihito

いる。編者の言葉がなく、出典元も記載されていないため詳細は不明であるが、日記帳は同期間も継続して書かれ、それが現在行方不明となっている可能性が高い。

日記が再度確認できる1957年以降は、日本での日記帳5冊(No.12、No.16、No.20、No.26、No.48)と、海外渡航ごとに作られる日記帳とが併用されるようになる。これらは計7冊(No.13、No.14、No.15、No.17、No.18、No.19、No.21)存在する。1957年からの日本での日記帳は3年間の同一日が同一ページに書かれる書式の「三年連用常用日記」⁵が用いられる。「三年連用常用日記」と海外渡航の日記帳を併用する1957年から1971年までの期間を「第二期」と呼ぶことにする。この期間では日本での日記帳「三年連用常用日記」においてはその内容のほとんどが、面会者と訪問先に終始している。海外での日記帳については、記録とそこで考えたこと、そしてスケッチも頻繁にされるようになる。海外で手に入れたチラシや絵手紙といったものも挟み込まれている。

また第二期においては、1965年以降海外での日記帳が「spiral CROWN」⁶という日記帳に統一されることになる。これに伴い、海外での日記帳の内容が充実する。具体的には、文章とスケッチの量が増えそれに伴い日記帳の冊数も増えることになり、スケッチは色彩が豊かになる。

第三期：1972年-1980年

1972年から逝去する1980年までは日本・海外いずれの日記も「spiral CROWN」に統一される。この期間では、日記帳の体裁が日本と海外とのもので統一されるに伴い、その書かれる内容というのもあまり差がない。つまり、「三年連用常用日記」ではその体裁上文章のみの日記内容であるが、「spiral CROWN」に変更することで、日本での日記の内容にもスケッチが登場するようになる。また、記録としての性格が強かった第二期の「三年連用常用日記」に比べ第三期では記録だけでなく、考えたことや建築の設計に関するアイデアなども書かれるようになる。

3. 今後の活用

現在、上述の日記帳を含む吉阪隆正の個人資料は早稲田大学所有となり、建築学科が管理をおこなっている「早稲田大学建築学教室本庄アーカイブズ」(2014年設置)に保管されている。同資料は、今後の研究活用のために研究者に対しての公開も行う予定である。

註釈1 新宿百人町に1983年まで存在した。2日早稲田大学本庄高等学院内自習室に2015年設置。
31950年戦後第1回フランス政府給付留学生として渡仏。早稲田大学の教員の立場のまま1952年まで・コルビュジエのアトリエに勤務。**4** 吉阪と彼の率いた研究室の初期の代表作品。1956年竣工。**5** デザインフィル社製。3年間の同一日が同一ページに書き留める書式のもの。**6** マルマン社製。1冊で50ページ分のもの。

西暦	年齢	分析		日記帳	設計作品
		国内	国外		
1944	27			1	
1945	28			2	
1946	29			3	
1947	30			4	
1948	31			5	
1949	32	○	×	6	
1950	33	○	×	7	
1951	34	○	×	8	
1952	35	○	×	9	
1953	36	○	×	10	
1954	37	○	×	11	
1955	38	○	×	12	
1956	39	○	×	13	
1957	40	○	×	14	
1958	41	○	×	15	
1959	42	○	×	16	
1960	43	○	×	17	
1961	44	○	×	18	
1962	45	○	×	19	
1963	46	○	×	20	
1964	47	○	×	21	
1965	48	○	×	22	
1966	49	○	×	23	
1967	50	○	×	24	
1968	51	○	×	25	
1969	52	○	×	26	
1970	53	○	×	27	
1971	54	○	×	28	
1972	55	○	×	29	
1973	56	○	×	30	
1974	57	○	×	31	
1975	58	○	×	32	
1976	59	○	×	33	
1977	60	○	×	34	
1978	61	○	×	35	
1979	62	○	×	36	
1980	63	○	×	37	

Fig.3 吉阪隆正日記帳リスト (筆者作成)

- *1 早稲田大学理工学術院 助手 修士 (工学)
- *2 株式会社カッシーナ・イクスシー 修士 (工学)
- *3 早稲田大学理工学術院 教授 博士 (工学)

- *1 Research Assoc, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ.
- *2 CASSINA IXC.Ltd., M. Eng.
- *3 Prof, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.